

善之助は下宿の娘か、ウエイトレスのノロケを言つたり、西川の細君をカラカツて、盃を勉めて打つ突けられた話しをする。

新吉は一膳めしを思ひ出すのである。

善之助の顔は決して卑猥ではない。けれども鼻は奔馬し、目は狂犬みたいなのである。

小拙しと講釋を彼は得意とする。

其の聲は武者小路夫人の聲色まで真似るので、天晴れな好色の馬でも及ばない獨得のうるみを帯びてゐる。

井ノ頭の公園は近くだつた。

布施は瘦せぎすなホンヤク家で、長髪で饑無地の羽織を着て、市橋はドテラで真田紐を結んでゐた。

雪解の明るい空気を吸ひ乍ら、四人で歌を唄つたり小便したりして公園へ行つた。

新吉は初めてだつた。

樹立に積んだ雪がハラハラ散つた。